

数日後。

薄く降り積もった雪がクレールの朝を静かに染めた。
吐いた息が空気にほどけて、ストールへ顔をうずめる。

ほうき
箒を掃き出したとき、名前を呼ばれて顔をあげた。

「ルル……」

そこには朝日に照らされたツバメが立っていた。

「ただいまって、言っているのかな」

「……もちろんよ。おかえりなさい」

不安そうなツバメにほほえみかければ、彼は^{あんど}安堵したように息をつく。

「薬を飲ませたよ。母は寝たきりだったのが嘘^{うそ}みたいに、今、元気
にしてる」

「そう……。よかったわ」

「改めて、あの薬のすごさを知ったよ。それで、両親には薬のこと
内緒にしてほしいって頼み込んだんだ」

「え？」

「それが俺にできる、ルルへの……償いだと思ったから」

薬を手渡すことを選んだのは自分だけけど、ツバメの行動に胸をな
でおろしたのも事実で。

「本当はね、結構心配していたの。薬のことが広まってしまうん
じゃないかって。でも、ありがとう」

「それは俺の言葉だよ」

ツバメは一度だけ視線をはずして、また、私に向き直る。

「俺を許してくれて、薬を渡してくれてありがとう」

「いいのよ」

「それから……本当にごめん。君を傷つけて」

今度は私が目をそらした。

一步、また一步と、彼がこちらへ近づいてくる気配がする。

許せているのに、彼の顔を見ることができない。



目をそらしたルルに、俺がどれだけのことをしたのかを思い知る。

わかっていなかったわけじゃない。

彼女の前で、足を止めた。

「ルル……」

「わ、私……ごめんなさい。あなたのことを許しているのに——」

「いいんだ。俺がしたことは消えない。それは……事実だから」

「私が嫌なの。これからもあなたと仕事をしていくって決めたのは、私自身なのよ」

揺れる青い瞳が、俺を捉える。

そのまなざしはいつでも正直で、まっすぐに相手を見つめている。

今だって。

まるで自分の傷と向き合うように、それを負わせた俺自身と向き合うように。

「俺も、ルルとともに働いていきたい」

「ツバメ……」

「失った君の信頼を取り戻したい」

その言葉に嘘はない。

いいや、これからルルに向ける言葉は、全部本心で——。

「今の俺がこんなことを言っても、信じてもらえないかもしれない。
だけど、それでも……」

彼女にも、自分にも、素直でありたいと思った。

「俺、ルルが好きなんだ」

「……え？」

見開かれた青が、日に透ける。
やっぱり——きれいだと思った。

「どうか、これからの俺を見ていてほしい。信じてもらうために、
がんばるから」

ただ望むのはそれだけ。

「……わかったわ」

俺だけをまっすぐに見て、細い息を吐きだして、ルルは言った。

「ちゃんと見てる」

「ありがとう」

まだ、隣に立つことはできない。
それでも、向き合うことは許されている。

「これからも、よろしくね。庭師さん」



「うん。よろしく」

差し出した手に、ルルが自身のそれを重ねて。
繋がれた手のひらのぬくもりを、俺は、春のようだと思った。

エンディング C【はばたきを胸に】

